

情況の浮力に抗する指示向線を！

戦後世界の変貌がその内的腐蝕を露呈しながら、鋭く立ち現われている。インフレ現象からロッキード疑獄に至る支配的な政治・経済構造のなかにおいてだけでなく、それはまた私たちの日常生活そのものにも立ち現われている。もちろん、この光景はアメリカ政治の次から次へという内的腐敗の露呈から、中・ソ対立に至るまで世界的な情況である。そういった情況のなかで私たちは、情況に関わること自体がしんどくなつていくことを日々受感している。こういった情況の圧力の根源がどこにあるかは、ある程度透視可能なことである。それは世界そのものが構成的に拡大し、多重で多義的な構造へ転化していることによつて对象的に捉えることが困難であるということに違いないと思う。また、日常的な生活過程へ覆いかぶさってくるものが多種多様で膨張して現われることによつて、正体不明の圧迫感に見舞われるということに違いない。そして、それ故に情況の総体に立ち向かうとする運動体にも、そのことは鮮やかに刻印される。それは、あらゆる集団や社会的諸勢力が相互に平準化し、双貌の様相を呈していくことによつて運動の当事者にも大衆にも、すべてを浮遊する無力な中間性として映すことだ。そして、情況に立ち向かうとする感性与契機は、局地性と密室性へ追いつめられている。現象的に視るかぎり、社会の局所と知的な個々の内在性へ闘いの重力がかかつていくように見える。それ故に情況の根源に立ち向う戦闘力も極めて孤立した闘いを強いられている。中間的な運動や組織や思想の平準化と相互変容を拒否したいという欲求は局地性や密室性のなかで闘いの抗道を堀るべく、実体的にも感性的にも強いられているからだ。

そうであればこそ、また情況の浮力に抗し、あらゆる中間的なものの華やかさと腐敗の構造を打つというものは切実な課題であると言つてよい。国家や社会的諸制度の膨張はまた大衆の社会化や政治化を拡大するだけでなく、それを必然的に強いる。日常生活自体の矛盾や分裂感としてこのことは反映する。非大衆的・非国家的存在としての民衆の根源性と「国家―大衆」としての民衆の定在自体が日常的過程で矛盾を拡大させているからだ。この非国家的・非大衆的本質を媒介にしない、いかなる思想も運動もそこでは無効を宣告され続けていく。「国家―

大衆」の枠内での知識人・党への上昇も大衆への下降もすべてが平準化してゆくのは火を視るより明らかだ。また権力・反権力、階級・被抑圧階級・被差別階級、あらゆる言語や概念や像は、そういった円環のなかでは、その対他性を支配者に吸収されるか、自から死過程を演じるかにいたることは避けようがない。情況の浮力に抗し声を挙げ続けるためには、戦後思想の価値転換を貫行する視えない闘いを媒介とせざるをえないことは必至である。だが、言ってみるだけということにすぎなくても、あらゆる機会と方法を用いて発言し続けることは切実な課題であるに違いない。私はその切実さが普遍的なものであることを感じている。

情況への批判の声を挙げ続けるという課題からこの集会は企図される。そしてまた、そのように構成される。この集会在どのようなものとして視られようと、そのことは自由であるが、この集会在党派や何らかのグループの宣伝集会でも儀式的集会でもないことだけははっきりしている。この集会在何らの宣伝の意味もないし、またそういった意味での政治性は前提から拒否されている。もちろん政治的な意図が本質的な意味での政治力や政治性とは無関係であるように、この集会在本質的な意味での政治性をもてれば、これにこしたことはない。この集会在話し手と聞き手の間に情況に対する切実な課題が突き出されたかどうか、またそういった時間が構成しえるかどうかを唯一の目標とする。そして、それに終始する。そこでは全力を挙げて情況の課題を突き出すつもりである。あらゆる中間的な運動様式が解体するなかで、そういった基準の明確化と実践がもし意味を帯びるならば、それはこの集会的企図そのものでもあるだろう。だからまた集会は、あらゆる人々の参加を歓迎する。そして情況の課題を突き出そうとする熱意を期待する。

一、集会日程 六月十八日(金) 午後五時半開

場

一、場所 品川公会堂(国電大井町駅下

車)

一、発言 闘いの鞍部と課題・三上 治

情況の根源から・吉本隆明

一、主催 三上 治